

27 【どぞうおばけ】

村長の屋敷の庭の土蔵に、何かいるとの噂が立ちました。

何しろ古い古い土蔵だから、鼠くらいはいるだろう、と誰かがいって
いました。

あの土蔵には江戸時代の、貴重な雛人形（ひなにんぎょう）とか、明
治時代の、高価な五月人形とかが収められているとのことだから、鼠も
嚙（かじ）り甲斐があるというものである、と誰かがいっていました。

鼠ではない、と完ちゃんはいいます。

「ねずみだとしたら、ねずみのおばけだな」

鼠の百倍くらいは大きい、と完ちゃんはいいました。

「みたことあんのか」

ぼくは興味津々でききました。

「みたらいまごろしんどる」

完ちゃんは震えています。

「みないのにわかるんかのう」

ぼくは笑い飛ばしました。

「みなくても、ものおとでわかるんじゃ」

完ちゃんは、自信満々にいいました。

それはそうかもしれない。

鼠が動く音と、熊が動く音ではちがう。

あの土蔵なら妙なものがいても、ちっとも不思議ではない。

「そいつはなにかのう」

「そいつがなにかわかったら、くろうはしない」

完ちゃんは偉そうにいいました。

苦労なんかしているとはおもえない暢気（のんき）な顔です。

「こういうときは、かいじいじゃ」

ぼくは完ちゃんをさそって、懐爺のところに行きました。

「そいつは【どぞうおばけ】です」

と懐爺は即答しました。

土蔵にいるおばけが、【どぞうおばけ】とは安易すぎる。

そんなことを考えたが、いいません。

代わりに完ちゃんが、

「【どぞうおばけ】 たあ、どんなすがたなんじゃ」

とききました。

「姿を変えるから【どぞうおばけ】と呼ぶしかないのです。あるときは【ねずみおとこ】に、あるときは【くまおとこ】に、またあるときは【やみおとこ】になります」

「【やみおとこ】のう」

ぼくはつぶやきました。

【ねずみおとこ】とか【くまおとこ】なら、姿を連想できる。

でも【やみおとこ】では。

「そうです。【やみおとこ】に変わったときの【どぞうおばけ】ほど、おそろしいものはありません」

懐爺は両手で、ぼくの首を絞める真似をしました。

「どんなふうにおそろしいんじゃ」

完ちゃんがとききました。

「何せ闇ですから、正体がみえない」

「そんなら【とうめいにんげん】とおなじかのう」

ぼくはとききました。

「【とうめいにんげん】は闇にならなくともみえないのですから、【やみおとこ】とはちがいますね」

「【やみおとこ】は、どんなわるさをするんじゃ」

完ちゃんがまたとききました。

懐爺は返答に窮（きゅう）していました。

それでもようやく、

「擦（くすぐ）ったり、ですかね」

と答えました。

完ちゃんとぼくは大笑いしました。

懐爺は機嫌を悪くしました。

「擦られて死んでしまう人だっているんですよ」

「そらあ、そうかものう。わしも、しぬかもしれん」

ぼくと完ちゃんはまた大笑いしました。

笑いながらぼくは、大きな疑問をぶつけました。

「おぼけがいないと、このよはやみじゃろ。おぼけがいても、このよはやみかい」

懐爺は困った顔をしました。

「その闇とこの闇はちがうんですが」

「どちらがうんじゃ」

「それは金ちゃんが大人になったらわかりますよ」

「こどものわしにも、わかるように、せつめいしてほしいのう」

「そうじゃそうじゃ」

と、完ちゃんも同調しました。

懐爺はさらに機嫌が悪くなりました。

さらに困った顔にもなりました。

ぼくと完ちゃんが、その台詞（せりふ）を繰り返したので、懐爺は祠の奥に消えてしまいました。